
天然彼女と女苦手彼氏

棟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然彼女と女苦手彼氏

【NZコード】

N5343A

【作者名】

棟

【あらすじ】

天然彼女と女が苦手な彼氏の話好きになつたり興味なかつたり！？

1話：【野咲花】編

『ふ〜〜〜〜〜！残念でした〜〜〜！答えは猫で〜す』

ケラケラ笑いながら喋っているのは、野咲花（16）高校1年生。（ちなみに問題は、追つても追つても逃げて行く物はな〜んだ）

『そんなのキミん家だけだよ』

呆れ顔の友人、伊藤ケイ（16）同じく高校1年生。

『そんなことないよ〜〜！あたしこの前ノラ猫に近付いたら逃げられたよ〜〜！他にも近所の飼い猫にも逃げられたし〜』

『ごめん。さつきの訂正。それキミだけだよ』

『ヒドイ！でもあたしの愛はいつも一方通行〜〜どんなに愛をおくつても受け取つてはくれない』

入り込んでいる。

『なにが愛よ。動物にしかおくつたことないくせに』

『ウツ〜〜い、いいじやんべツに』

野咲花は今まで人間の に惚れたことがない。

『アンタ顔だけなら男から人気あるのに…』 そう顔だけは可愛い。顔だけは。

『でも、言動に問題あり。服装も気を使つことなんてないし。化粧

なんてしたことない。今時の女子高生が』

『いいじやん！それにホラッ！スカートは短いヨ〜今時の女子高生つて感じジャン』

フフンと勝ち誇ったように言つ。

『ああ私がしてあげたやつね』

『ありがとうケイちゃん！』

バツと抱きつく花。

『ちょいちょい話がそれてる』

サツと離れるケイ。

『ふざや〜〜』

『一回ぐらい付き合つてみたらいいのに』

『めんどくさいし…。男なんて皆一緒に見えるし…。興味ないし』

『あ～あ、アンタ天罰くらうね』『

『えつ？なんで！？』

オロオロする花。

『ベツに……あつ』

ゴツン！

スゴい音で花が電柱に頭から激突した。

『あつちや～ホントに天罰？』

空を見上げるケイ。

（学校）

『アハハハハ！それで電柱に激突したんだ！ウケる～』

コレは友人の岡田。

『ホント天罰だねアハハハハ！』

同じく友人の相葉。

『痛かつたんだから！』

『でもアンタ本当に好きな人いないの？』

問掛ける岡田。

『うん！あつ1人いるかな』

『ええつ』

『誰？誰？』

興味津々の岡田と相葉だが。

『正太郎』

『えー誰それ？』

『つてか好きな人いるじゃん！』

さらに盛り上がる岡田＆相葉。

『…それアンタん家の猫じやん。しかも1人じゃなくて1匹だし』

すかさずケイがつっこむ。

』…………。『

落胆する岡田相葉。

『エへへ～』

つという毎日をすこししてゐる野咲花と一同。説明通り、男に全く興味がない花だったが、朝電柱に頭を激突したせいかこの後、人生で初めて人間の　を好きになつてしまつ。

（放課後）

『ケイちゃん帰ろ～』

『私今日は部活あるから』

ケイは軽音楽部に入つていて、ギターを担当している。週2で部活があり今日はある日なのだ。

『チエツ。じゃあ岡ちゃんと相葉でいいから帰ろ』

『なによ、でいいからつて！』

『しかも、じゃあつて…！』

不服そうな岡田と相葉。

『それに私たちは合コンがありますので～ホホホホ

高らかに笑う岡田。

『じゃあ～ね～』

ヒラヒラと手を振り去つていく。

一人ぼっちになつた花は渋々と帰ることにした。

『あ～あつまんないなあ～』

トボトボ帰る花。

ガツン！

『フゴッ』

また電柱に激突し、さらに奇声を発した。

『イタタタ…』

『大丈夫ですか?』

一人の男性が心配そうに後ろから声をかけた。

『あっ大丈夫です…。』

振り替えたら。見たことのある制服。あっ、うちの高校の人じや

ん。でも見たことないなあ。誰だろ?まあいいや。

『じゃあこれで…』

立ち去る男性。もちろん男に興味のない花なのでこんなマンガみたいな展開恋愛は始まらないのであつた…。

1話：【森大地】編

『よつ大地！』

『なんだヨシタカか』

『なんだって…。それにしても相変わらず暗いなーお前』

彼は森大地（16）と友人の岩崎ヨシタカ（16）どちらも高一。

『おつ前見てみるよ』

ヨシタカがそう言つたので前を見ると女生徒が2人歩いていた。

『隣のクラスの伊藤ケイと野咲花だぜ。どっちも可愛いんだよなー。伊藤ケイはクール系だな。野咲花は可愛い系だけどイロイロ問題ありだ…。』

聞いてもいらないのに淡々と話を続けるヨシタカ。

『まあお前に話しても無駄だな。』

じやあ言つな。

『なんせ女が苦手なんだもんな』
ハハハハと笑いながら言つた。

ゴツン！

…あつ電柱にぶつかつてる。

『なつ！野咲花はアレだからなー！』

また笑いながら言つた。

『ふうん』

（学校）

『オイ！大地！隣のクラス行こうぜ』

学校について早々にヨシタカが面倒なことを言つた。

『…やだよ面倒くさい。意味ないし』

『馬鹿！なに言つてんだよ！お前さつを見ただろ』

『？』

『野咲花だよ！電柱に激突した』

『え？ 見たけど…』

ヨシタカがなにを言いたかったのかよくわからなかつた。

『鈍感だなお前は！話すきっかけが出来ただろ！今がチャンスなんだよ』

『お前一人で行けばいいじゃん…』

『アホか！あつちは2人だぞ！それならこいつちも2人で行くべきだろ！』

『…違う奴誘えよ』

『残念ながら俺の知り合いの中でキミが一番ルックスがいいんだ』

『残念の意味がわからん。』

『それで？』

『だからついてこい！』

答えになつていないが無理矢理引っ張られて、隣のB組に行つた。
（B組前）

『よ～しついたぞ』

まあ隣だから直ぐついた。

『見ろ大地よ！窓際にいるぞ！…ぬつ』

一人で騒いでいる。忙しい奴だ。

『大変です！隊長！』

『誰？』

『敵は4人います！残念ですが太刀打ちできません』

『……………。』

『う～んあれは岡田香奈美と相葉夕夏だな。アレもなかなかなんだがな……アレッ？大地君オーライ』

一足先に教室へ帰ることにした。ヨシタカを置いて。

『お前な～友を置いて行くなよ～』

ヨシタカが帰つてきた。

『それにも本當にお前女に興味ないんだな。あつ興味がないん

じゃなくて苦手なんだな！ハハハハツ 残念残念』

森大地は女性が大の苦手。顔は最高なのに今まで彼女はいたことがない。それどころか女友達もいないし、まともに女性と話すことができないのである。しかし、女生徒の中では人気ナンバーワンである。

（放課後）

『大地、今日はつきあえよ』

今日は合コンがあると昨日からつるさうぐらに言つていた。

『つて来るわけないよな～』

『わかつてゐなら言うなよ。じゃあな』

学校でヨシタカと別れ、帰り道についた。

まだ学校前だがこの道は人通りが少ない。今現在この道を通つているのは俺と前を一人歩いている女生徒だけだ。あつ

ガツン！

前を歩いていた女生徒が電柱に激突した。なんか朝見たような。つてか一日で電柱に激突する場面を一回も見るなんて貴重だな。

それにしてもどうしよう。なんか言つた方がいいのかな？さすがに素通りは出来ないし…。俺は緊張しながら声をかけた。

『大丈夫ですか？』

こちらを振り向いた。この人が野咲花さんか…。つてかやつぱり話しかけるんじゃなかつた…。早くこの場から立ち去りたい。

『あつ大丈夫です…。』

よしつもういいだろう早く行こう。

『じゃあこれで…。』

そつ言つて早々に立ち去つた。

2話・変化なし

『ハナ～！？』

登校中、ケイが花に近づくが元気のない花。

『どうしたの？珍しく元気ないじゃん！』ぼーとしてる花

『オーライ生きてますか～？ってあんた傷が昨日に比べて一つ多いん
ですけど』

『…………はっ！？あっケイちゃん！？えつ何？キス？INEですけど
？？？』

『……何言つてんの？』

『……あ～？』

いつもチンパンカンパンな花。軽い沈黙の時間が流れる。

『おはよ～』

後ろから岡田と相葉が寄つてくる。

『あつ岡葉ちゃんオハヨー』

『おいつ！私と相葉を混ぜるなよ』

『えーじやあ相田ちゃん？』

『いやいや変わんないから～！』

朝から花と岡田相葉のコントを見せられるケイ。

若干、花が元気無いのを気にしながらもそういう田もあるだらうと
余り心にとめる事はしなかった。

後ろを歩く大地と三シタカ

『なあなあ聞いてくれよ～昨日合コンしたんだわ～』

まあ前々から言つてたし

『そしたら、どこでどう間違つたか岡田と相葉があつち側にいたん
だよ！そしたらあいつら俺の顔見ると明かに、え～つて顔するわけ』

『…………』

『あれ？大地君今笑いませんでした？まっそれで、俺も対抗して、

えぐつて顔するわけ、そしたら吉崎のくせに何調子こいてんの的な流れになつてさー…………』

ヨシタカはその後教室につくまでずっとその話を続けていた。

『～でまー結局、2人とも仲良くなつたんだけどな』

ニカツと笑いなせか誇らしげで話を終えた。

『よかつたな。じゃあこれからは俺に付きまとわす、その人達と仲良くしていけよ。』

軽くあしらう。ただ他に言うこともなかつたし。

『いやいや残念ながらそつはいかないんだな。あの2人がさお前とも仲良くなりたいつてさ。まあ女からしたらお前は憧れの的なのに、なかなか仲良くなれないからな。そこで親友のオレを頼つてだな～…あれ？オレつて利用されてるだけ！？』

相変わらずひとりで騒ぐヨシタカだった。

『いや俺はいいよ。別に話すことないし…………つてか話せないし

…』

モゴモゴと声を小さくして言う大地

別に苦手だから興味がないわけじゃないけど今すぐ彼女がほしいとか女友達がほしいとかは思わない。年を重ねればいつか自然に話せるようになるだろうし。でも今は女性と話すのは苦手だし、苦手なことにチャレンジする意味ないし。

一方花達の教室では。

『ちょっと聞いて聞いて！』

元気よく喋りだしたのは岡田。

『昨日合コンだつたんだけど～ど～でどう間違つたか隣のクラスの

岩崎曰シタカが来てたわけ！』

『 そりそり、もう、えーって感じだつたんだけど、あいつ必死だつたし、よく考えたらあいつあの森大地君とスッゴい仲良いんだよね』

相葉と岡田が交互に話す

『 で、まずあいつと仲良くして、利用して森君と仲良くなるつて作戦！ そしたら私たちは森君レースでトップを走れるの…』

ニコニコ笑いながら話す岡田

『 えつ何その森君レースつて…？』

大体は予想つくが一応聞いてみるケイ

待つてましたと言わんばかりに答える相葉

『 も～ダメだなケイは～。いい？ 森君レースつてのは～あの女の子と全然話さない超カツコイい森君を誰が射止めるかって話。でもまず話すつてのが第一関門なわけ！ そこで岩崎を使って…』

フフンと得意げに話す。まあそんなもんだろうなど。

しうもない話でも聞いてあげるのが友達なんだとひとり納得するケイだつた。

『 んで私たが今一歩進んだ感じ？ あんたらはまだスタートラインだね』

『 まだ話でないんじゃないの？ ってか勝手にレースに参加させないでよ。私興味ないし』

冷えきつてるケイ。ケイらしい事だけ。

『 え～つまんない！ あつ花は？？ 森君…知つてるでしょ！？』

『 …誰？猫？』

『 ……』

『 ……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5343a/>

天然彼女と女苦手彼氏

2010年10月10日13時38分発行